メディアに注目される「小農学会」

昨年、小農学会の萬田正治、山下惣一両代表が、それぞれNHKのテレビとラジオに出演しました。萬田代表が5月29日放送の「視点、論点」、山下代表が7月14日放送の「ラジオ深夜便」でした。それぞれ小農と自らが思う農について存分に語っています。視聴された方も多かろうとは思いますが、今一度、熟読していただきたく、ここに再録します。

NHKテレビ番組「視点・論点」

「今、なぜ小農なのか」

萬田 正治

戦後72年になろうとしていますが、日本の農業と農村に吹いた風は、誠に強い向かい風でした。農村からの出稼ぎや集団就職列車など暗くて悲しいニュースばかりの昭和30年代、私は高校生でした。いま放映されているNHKの連続朝ドラ「ひよっこ」の情景そのものでした。なぜ私たちの大切な食料をつくる農家の人たちが、貧しいのか、豊かになれないのかに疑問を抱き、大学は農学部に進学することを決めました。農家や農村が豊かになれないのは社会のどこかに問題があるのではないかと考え、一生懸命に勉強しました。しかしながら、農家と農村は豊かにならないどころか、益々衰退の一途をたどってきました。

還暦60の歳、私は農村再生の課題を人生最後の宿題として大学を早期退職し、鹿児島の里山に移り住みました。

農村に移り住んで14年の歳月が経ちましたが、農村に住んでの私の印象は次の通りです。

1. 赤ちゃんの泣き声がしない
2. 家畜の声もしない！　庭先に鶏がいない
3. 魚釣りやトンボを追う少年の姿を見ない、戸外で遊ぶ子どもがいない
4. お年寄り・一人暮らしが多い
5. お葬式が多い
6. 廃屋が増えた
7. 周辺の生き物、鳥・蝶・虫・魚などは減っている。
8. 伝統芸能や文化財の保護も困難となってきている
9. 都会に出た子どもたちは帰ってこない
10. 今や集落は、限界集落から消滅集落へと向かっている

このままでは中山間地の農村社会が消滅します。平野部に一部の施設型の大規模農業と企業農業経営が残るのみです。しかし、それは世界の富裕層を狙った輸出型農業であり、我が国の食糧自給率はさらに低下し、食料輸入大国となります。つまり、我が国は第二次と第三次産業が主体の国となり、一部の大規模農業は残っても農村は消えていくのです。

私は産業が発展すれば国民みんなの暮らしも豊かになると信じ、大学の一研究者として、農業の研究に一心不乱に取りくんできました。しかし、農村から若者は流出し、後継者は育たず、農家の暮らしは豊かになりませんでした。

私は40代後半の頃から、水田で稲と合鴨を同時に育てる合鴨農法の研究に没頭しました。合鴨たちは田んぼの中の雑草や害虫を食べ、しかも、排泄する糞は稲の肥料となり、無農薬による米づくりが初めて実現したのです。この普及のため合鴨フォーラムも組織しました。フォーラムではいつも笑い声が絶えず、明るく農を楽しむ全国の合鴨農家と学習交流を深めていくなかで、実は農業には二つの側面があることに私は気付くようになりました。

それは、(1)産業としての農業、産業農業と(2)暮らしとしての農、生活農業があるということです。つまり、農業と農は区別して考えた方がよいのではないでしょうか。戦後の農業政策は産業としての農業、すなわち産業農業の発展のみを一面的にとらえて専業農家育成を掲げて推進してきました。しかしながら、今現在でも農家の多くは兼業農家が主流なのです（約80％）。農家の多くは家族を養うため、小さな農地を守って他産業で働くかたちで生き延びているのです。戦後

の農政への抵抗と知恵の証が小さな農家と兼業農家の存在です。これを小農といいます。そして、このような小農が農村社会を形づくり守ってきているのです。

この小農の視点こそが①国土（資源）を有効に循環的に活用し、②自給自足、地域流通により食糧自給率の向上を図り、③食の安全性と安定性を保障し、④農業の低コスト化と⑤田園の自然環境を守り、⑥小さな農地の多い中間山地農村を守ることになります。そして、農村の人口減少をくい止め、都市との調和を実質的に推進していくことになるのではないでしょうか。

また、農村は一つの共同体社会です。村を守るために沢山の共同作業があります。私の集落を例にとれば、次のような共同作業が年間を通して行われています。

- ●道路の草刈り・清掃
- ●土手の焼き払い
- ●山林の下草払い
- ●公園の草刈り・清掃
- ●ゴミの回収
- ●共同墓地の草刈り・清掃
- ●お葬式

このような共同作業を大規模・企業農業が村に進出してきても、これのみで維持することは出来ないでしょう。また、大規模・企業農業者は採算がとれなければ出ていくのみです。なぜなら、その村に責任もなく愛着もないからです。ゆえに現政府のすすめる農業政策のみでは農村社会は消滅するのです。

そこで、産業としての農業、産業農業と暮らしとしての農、生活農業を複眼的にとらえ、農業・農村政策を掲げることが重要です。

世界全体をみても同様です。国連は小規模な家族農業経営こそ世界の食糧危機と環境破壊を守るとして、２０１４年を国際家族農業年と定めました。

いま国内でもささやかな追い風が吹き始めています。

1. 国内農業を見直す気運が高まっています。
2. 異常な食糧自給率の低さに気づきはじめた人たちが増えています。現在の食糧自給率は40％を割り、この異常な低さは先進諸国の中でも突出しています。
3. 有機農業推進法が制定、市民権を得ました。この法律は平成18年に制定され、国及び地方公共団体は、有機農業の推進に関する施策を総合的に策定し、及び実施する責務が課せられたのです。
4. 就農・農的暮らし・体験・市民農園・定年帰農者が増えています。
5. かつての農業への軽蔑はなく、今の若者は農業に憧れを感じ始めています。
6. 地産地消、産直、小さな直売所が市民権を持ち始めています→新たな流通の始まりです。

私の地域でも農林産物直売所「きらく館」がつくられ、小さな直売所ですが、年間売上額２、０００万円以上を維持し、もう13年も店はつぶれることなく続いております。

しかも、この直売所のメンバーの多くはお年寄りで、小さな農家が中心となっており、まさに小農を守る直売所でもあります。また、この小さな直売所には片隅に小さなお茶コーナーが設けられ、お客さんや地元の農家の人たちが寄り集まり、賑やかな交流の場となっています。

さて、高度経済成長を遂げた現代の日本において、小農とは何か、改めて新しい位置づけと定義が必要と考えています。それは小農をこれまでの既存の小農のみに限定せず、農的暮らし、田舎暮らし、菜園家族、定年帰農、市民・体験農園などに取り組む都市生活者も含めた階層こそが、新しい小農と定義づけたいと思います。そして、このような新しい人たちも加わって新しい村が再生していくものと思います。

戦後、我が国は産業を第一次、第二次、第三次産業の３つに分化して発展し、大部分の人が第二次と第三次産業に従事するようになりました。しかし、これからの社会は第二次、第三次産業に従事する人々も、小農として何らかのかたちで、命の源であり、人の生きる礎である第一次産業に関わる時代を迎えるのではないかと思います。

これが私の考える次の新しい社会であり、また中山間地農村の再生の道筋でもあります。

NHKラジオ深夜便～明日への言葉

「小さな農業が日本を支える」

山下 惣一

――小農学会を立ち上げられました。小農、小さな農業とは？

山下：日本の農業は戦後の農地解放で、みんな小さな農家になった。だから、みんな小農じゃないでしょうか？　面積や売り上げで区切るのではなく、目的で区別したんです。家族で働いて、そこで暮らしていくことを目的にする。私はここの6代目の百姓ですが、代々ここで暮らしていくための主な手段として農業をやってきた。親父は石屋なんかもやっていたし、山もある。いろんな事をしながら暮らしを立ててきた。それを小農と言うんです。大規模に同じもの、しかも、外国人労働者を入れてやっている人たちは、それは大農だ。小農は私が若い頃好きだった守田志郎って人が最初に使った言葉で、利潤追及が目的ならどんなに小さくても大農だと書いている。家族労働で暮らしを立てることを目的にやるのなら、規模は大きくても小農。農業の目的によって区別するんです。

この会を立ち上げる時に、学者の先生たちは最初、生活農業という言葉を使いたがった。生活農業学会にしたらどうかと。私に言わせると、生活と暮らしは同じではないんです。生活の糧を稼ぐためにやるのが労働でしょ。農家の場合は、暮らしのためにやっている。やってることそのものが暮らしなわけで。そこが一般の労働と農業がちがうところ。

お金がなかったらどうにもならん、という世の中になってますけど。農家の場合は米も野菜も果物も買わない。金に依存しない部分があるのが、農家の豊かさじゃないかと思っているんです。だから、生活農業じゃダメだろうと、小農になったんです。

一般の人は農家を見て辛い労働をしていると思うでしょ。そうであるならば、農民の一生というのは非常に辛いということになる。熊本に松田喜一という農民の指導者がいて、私は若い頃、その教えにすがってそこをクリアした。松田先生はともかく「仕事を労働にしちゃいかん」と言うんです。なぜか。今、消費者が金をはらっていちご狩りとか、さくらんぼ狩りとかしているでしょ。それは農業の仕事の中に娯楽があるってこと。農家に休養は必要だけど娯楽は必要ないと言われる。仕事を楽しめと。道楽にしろと。

消費者のいちご狩りや農業体験は、あれはレジャー、娯楽でしょ。迎える農家の側もそうなれというわけ。大農になるとそうはなれない。

私は81歳になるまで農業以外はしたことはないけど。自分の仕事を労働と思ったことはありません。しかし、なかなか道楽にはなれないが(笑)。それが小農にこだわった理由です。

もう一つは、わたしの人生でいちばん記憶に残ってる思い出があるんです。35歳の頃だったと思う。当時はやる気満々で規模拡大路線でミカンを植えたりしてたんです。うちは中山間地で棚田が多くて、3反歩で31枚という田んぼがあった。それを基盤整備で1枚にしたいと思ったんですが、そばに帯を並べたような兼業農家の小さな田んぼがあった。その田んぼを取り込まないと、形がうまくいかないので、そこを買って1枚にしたんです。

稲刈りが終わって現地に行ってみたら、わら人形があって燃やした跡があった。ゾッとしまして、なんだこれはと調べてみたら、前の地主さんが「田んぼは自分のものではない。先祖から預かってるものだ。それを手放すのは先祖と別れること。だから、先祖別れの儀式をした」って。衝撃でしたね。

その時に私は自分が大きくなることだけ考えて、相手のことを考えてなかったことに気付いた。自分が生きていかなきゃならんように、相手も生きていかなきゃならんということに思いが至らなかった。自分が大きくなるということは、小さくなる人がいる。それはまずいんだろうな、と思った。それからは規模拡大は目指さなくて、限られた土地でやれる方法を見出していくしかないと…。

幸いここは一年中なんでもできるところですから、まず複合経営でいく、単作にしない。いろんなものを作る。一年中、仕事が途切れないように、失業しないようにね。一年中、収入が途切れないように、細々とやってきた。その収入で暮らせばいいわけで、それでずっとやってきました。

――**山下さんはそうでも、お若い方はそのやり方で納得されましたか？**

山下：息子ですか？　そのやり方にしたのは、アメリカへ農業研修に行った息子が帰ってきて、さ

あどうするか。ミカン農家は後継者がいなくてやめていくから、今から植えればちょうどいいと、2人でミカン山を増やしたんです。そしたら、まあ長いトンネルでねえ。40年、ミカンはトンネルの中で。ミカンだけやってたらもう支えられなかった。他の作物をやってたから赤字のミカンを支えられた。今でも5反作ってます。ミカンは今はよくなりましたが。そういうこと考えると身の丈サイズがいちばんいいと。

――1つの農作物だけ拡大してやってると、それがダメになったときどうするかと…。

山下：そうそう。そういう思いがずっとあった。でも年も年だし、人様の前で言うこともないだろうと思って我慢していたんですけど。

たまたま2014年に国連が、国際家族農業年を定めて報告書を出したんです。「家族農業が世界の未来を開く」と。それを読むと、なんか俺が言ってること全部書いてある気がして。

その報告書によると、世界の農家の70％が1ha以下。2ha以下だと85％。世界の農業の90％は家族農業なんですって。だから、家族農業でやらなければならない、というのは農業の特性なんです。まずは自分を養う。自分の国を養う。自分は食べなくて、よそに輸出することなんかできないということです。

私なりに、この報告書の内容を5つにまとめてみた。

(1) 世界の農業は90％が家族農業。家族農業が世界の農業の土台である。

(2) 飢餓人口が8億人いると言われており、アフリカ、東南アジアに多いんですが半分は農民。土地なし農民や非常に零細な農民が飢えてる。そういった国々に農業国が食料を援助するじゃないですか。そうすると相手国の農業を潰すことになる。それでは飢餓は解消しない。食料を送るのではなく、そこの小さな農家を手助けするのが大事だと言っている。

(3) 大規模農業に比べて家族農業は土地生産性が高い。面積あたりの収量が多い。環境保全型である。

(4) 家族農業は多くの人にとって故郷であり、文化芸能の伝承者でもある。農山漁村から都会に人が集まったわけで、家族農業が支えている村はみんなの故郷であり、伝統芸能はそこにしか残っていない。

(5) これがいちばん大事だと思うけど、農業の専門特化はリスクが高いということ。リーマンショック後の世界的不況の中で、ヨーロッパの企業農業がバタバタ倒産したことを例に挙げ、これだけ世界がグローバル化して流通が自由になっているなか、単作でそれだけ作ってると、それがダメになるとどうしようもなくなる、としている。

以上、5つのことが書かれており、さらに、兼業を農業のリスクを回避する有効な手段だとしているんですよ。そして、各国の兼業農家率が書いてあるんだけど、オランダの農家の90％は兼業農家、フランスのような大農主義でやってきたところも60％は農業以外の収入を得ている。日本の兼業率は75％。アメリカも統計を調べてみたら、販売額250万円以下が68％ですから、7割近くは兼業だと考えていい。

日本は農業がダメだダメだと言ってるけど、そんなことない。私は50カ国ぐらいみて回ったけど、言えることは農業の盛んな国、農産物輸出国である国の農民なんて悲惨なもんですよ。ブラジルもそうだし、アメリカもそうです。なぜかというと余っているものを作っているからです。余っているから輸出するわけだから。ブラジルの人と話したら、ブラジルには農業しかない。みんなで余っているものを作っているのだから、儲けが出るわけがないと言ってました。

――ブラジルのそうなっている時に、なんかいい知恵はないんですか？

山下：農産物は他のものと違って、過剰生産恐慌ってのはどうにもならない。作りすぎたら、どうにもならないです。生産調整をするなど計画的に作るしかない。

農業の特性などいろんなことを考えると、やはり小さい農業がいい。ということで、2年前、小農学会を立ち上げたわけです。私の考えでは小農が集まって政治活動しようとか、何かアクションを起こそうというのではなく、いろんな理屈、小理屈を総動員して農業は小さくなきゃダメだと発言しようと。

――でも集まって話をする以上、何か行動を起こせる提案がないとダメなんじゃないですか？

山下：それぞれが、いろいろやってますよ。3月に第1回の現地検討会を鹿児島でやったんですが、地元のスーパーと提携して伝統野菜を26種作ってる農家がいる。また、農業体験農園を運営したり、子どもたち向けの農業教室をやったりし

ている。それぞれやってるんです。そういう人たちが集まって知恵を出し合う。兼業農家も自給農家も市民農園に通っている人も、家庭菜園を作っている人もみんな集まってやろうと。

――今、所得格差が広がっていると問題になってますが、農業の面でも所得や技術に差が出ているということがあるんですか？

山下：もちろん、そういうこともあります。大規模で利潤の追求を目的にやってる人たちを、国は一所懸命に応援してますが、これはこれでいいんです。我々は暮らしを目的としてやっている。金はもちろん必要です。金がなければやっていけないけども、余るほどはいらない。なんのために必要かというと、豊かな暮らしをするために必要なのであって、金を稼ぐだけが人生ではないという価値観を持っているということです。

――日本の農業は小農が支えて、兼業が支えて、どういう方向へ向かったらいいんでしょう？

山下：将来的にはオーガニックになっていくんじゃないでしょうか。有機農業ですね。それと地産地消。世界の富裕層を目指して米を作ろうという気はまったくないわけで、地元の人に食べて欲しい。日本の農業は日本人に支えて欲しいし、日本人のための農業をやりたいと思います。全国に小農がいっぱいいたら安心じゃないですか。

まず自分が暮らす。そして、身近な人たちに食べ物を供給する。それを全国でやればいい。植物も家畜も決して裏切らない。だから、農業は楽しいんですよ。みんなにやって欲しいなあ。

――ところで、山下さんは農民作家と言われますが、何かきっかけはあったんですか？

山下：もともと人間には向学心があると思うんです。私も勉強したくてしょうがなかった。ところが、父親が養子にきた人間で家を潰すというのが一番、怖かった。どうやったら家が潰れるかと、親父なりに考えたんだと思うんですよ。それは潰れた家を見ればわかる。結局、教育だ。子供が頭がいいとなると、教育をつけようと都会に出す。で、帰ってこない。それで家が潰れる。「教育は家を潰し、村を滅ぼす」と考えていた。だから、高校に行かせてくれなかった。それで通信教育で2年間、勉強して大検を受けようとした。試験は7月はじめ。その頃はちょうど田植えの時期だった。試験を受けさせてくれるよう頼んだら、父親が怒って棚田の上から下の田んぼに突き落とされた。泥の中に顔を突っ込んで泣きましたよ。それで、こんな所にいるもんかと思って2回家出しました。最初の時は捕まって、2回目の時は自分から帰ってきました。

なぜ帰ってきたのかというと、結局、自分が逃げても農業も農村も家も残るわけです。辛い労働も残る。だから逃げるのはまずいんじゃないか、逃げ出さなくてもいい村を作るべきだと思ったんです。

通信教育をやめた後、勉強していた夜の時間がそのまま空いてしまった。その時に小説を読み始めたんです。ほとんどが太宰治でしたが、太宰の「晩年」という短編集があって、その中にたけという女中と一緒に蛍を獲りに行って、捕まえてきた蛍を蚊帳の中に飛ばして遊ぶという作品があるんです。恐ろしいことに、これくらいなら自分でも書けると思った（笑）。それから文章修行です。志賀直哉とか、太宰とかの短編を原稿用紙に写すというのをやりました。当時、素人が投稿する文芸雑誌があって、それに原稿用紙40枚ぐらいのを出したら、載るじゃないですか。それでしばらく書いていました。

その後、20歳から30歳まではまったく読み書きせずに農業に没頭した。その時に松田喜一先生の「仕事を労働にするな、道楽にしろ」という教えも受けて、百姓になったんです。ところが、32、33歳の頃、草を刈る刈払い機で足を切って田んぼには入れなくなって、10日間くらい家でぶらぶらしていた。その時に佐賀県の文学賞があると知って、昔書いたことがあるのでやってみるかと書いて応募した。それで病気がぶり返した（笑）。一席もらって新聞に載ったら、「またそんな事、始めたか」と青年団の仲間にも親にも嘆かれた。そして、地元の同人雑誌に入って書いた小説「海鳴り」で農民文学賞をもらった。昭和45年、ちょうど米の減反政策が始まった年だった。農村がどんどん変わっていくでしょ。百姓しながら書くので、現場報告みたいな形でどんどん書かされた。それで、農民作家という風に言われるようになった。百姓が書いてるだけで作家でもなんでもないと思っている。

――でも、直木賞候補にもなられたし、「ひこばえの歌」がTVドラマにもなりました。あれも何10年も前の話なんですね。

山下：だって平成がもう30年ですよ。「ひこばえ」って言葉は普通使わないが、杉檜では出てこないけど、雑木を切るとまた芽が出てくる。それ

を「ひこばえ」という。稲でも同じです。刈られても、刈られても芽が出てくる。百姓の生命力、農家の永遠性みたいなものを象徴する言葉として使ったんです。今は小説は書いてないけど、新聞、雑誌のコラムは続けています。書くってことは、書いたことに責任を取らなければならないので、勉強はしますね。中学校までしか行ってないけど、人生はずっと勉強でしたよ。

——これまでずっと農業をやってこられて、今どんなことを思われますか？

山下：悔いはない。健康だし81歳でも現役でやっている。農業問題は消費者の問題だといろいろ言ってきて、「農家の主人から消費者へ」という本を書いたこともあるけど、最近はあまり言う気がなくなった。とにかく、一般の人が現場のことを知らなすぎる。そして、生命が見えなくなっている、隠されている時代だと思う。牛肉を食べる時、牛の姿なんか思い浮かばない。どういう環境で育っているかなんかも関心がない。食べるということは他の生命をいただくことだと知る機会がないんですよね。時々、ミカンを買いたいという電話をもらうことがある。9月の初め頃だったもんだから、まだ青いので「青切りミカンでいいですか」というと、「えー、ミカンって一年中、同じ色じゃないんですか」とすごく驚かれる。そういう人はいっぱいいますよ。

——農業の楽しみってどう思われますか。

山下：特に農家に嫁いだ女性たちはですね、多分、農業は嫌だったと思う。ところが、やってるうちに好きになるんです。腰が曲がっても畑に行くんですね。なぜかというと、まずは作物も家畜も裏切らないということ。努力したらしたほど、手入れをしたらしたほど、確実に報いてくれる。これが一番いいんですよね。私も最近思うんですけど、娯楽の楽しみは生産の喜びにはかなわない、及ばない。物見遊山にあちこちいくより、畑で草をむしってる方が楽しいのよ。なんでしょうね、これ。

松田先生に「楽と苦」という教えがあるんです。たとえば、一本の棒があって右の端が苦で、左の端が楽とする。その真ん中に人間は生まれる。人間は楽が好きだから楽の方に行くが、行けばいくほど楽が減って苦が増えてくる。こういう教えなんです。たとえば、鍬を持って畑を打つと手にマメができる。豆が潰れて痛い、そこで手袋をする。一枚では足らないので、二枚する。そうやって手のひらを弱くしていけば、いくほど苦は増えてくる。手のひらを鍛えて、鍬の柄に豆ができるほどこちらを固くすれば、全然怖くない。苦を克服していくと苦が減って、楽が増えるんだという教えなんです。それが農業ではよくわかる。

——食べるものがどうやって作られているかぐらいは知って欲しいですね。

山下：自分で作ってみるのが一番いいんです。簡単にはできないということぐらいは、すぐ分かるんですけどね。日本は都市と農村がこれだけ近い国ですから、やろうと思えばできる。社会情勢の変化によっては、そういう時代がくるかもしれない。

——ありがとうございました。

《「小農学会」入会のご案内》

小農学会へは研究者、農家に限らず、週末ファーマー、体験農園の参加者、産直で農家と提携を結んでいる消費者、半農半Xを実践されている方など、農に関心のある方ならどなたでもご入会いただけます。年会費は3、000円（入会金はいただいていません）です。

会員の皆様には学会誌をお届けするとともに、総会やシンポジウム、現地研修会のお知らせのほか、随時、活動の報告なども差し上げます。

活動の報告や連絡事項のほか、メディアの記事や会員による論文などを、学会のメーリングリストで逐次お知らせしていきます。メールアドレスをお持ちの方は、ご入会の際にお知らせください。

◎お申し込み方法

下記の「小農学会」事務局へ、次の項目を郵便ハガキ、FAXまたはメールにてお知らせいただき、左記の「ゆうちょ銀行」に年会費をお振り込みください。

（1）お名前　（2）フリガナ　（3）ご住所　（4）電話番号
（5）メールアドレス（お持ちの場合）

◎年会費のお振り込み先

ゆうちょ銀行　17880-32058051　小農学会

「小農」第二号
平成二十九年度 総会特集
2018年2月24日　発行
発行　小農学会